

序

- 一、本小冊子は日本國民の立場から滿洲問題解決の原則を闡明するために編まれたものである。
- 二、日本國民の立場とは、所謂公平なる立場又は第三者の立場と對立するところの觀念である。隨つて吾人は滿洲問題解決の原則として本小冊子に主張するところを、其儘客觀的眞理として何國の讀者に對しても強制しようと企てるものではない。
- 三、唯吾人は本小冊子に於ける吾人の主張が、一點一劃の例外もなく、日本國民の主觀的眞理であることを確信する。何となれば、これ等の主張目體は日本國民の判斷及希望に外ならぬとしても、此主張の基礎をなすものは、日本の置かれて居る政治的、經濟的及國際的環境、支那が今尙完全に國際責務を遂行し能はざることから生ずるところの特殊なる接壤關係、兩國又は多數國間に取結ばれた關係諸條約等、何人も疑ふことの出来ないやうな客觀的事實であるからである。
- 四、本小冊子は前にもいふやうに滿洲問題に關する日本國民の主觀的眞理を各國の讀者の前に披

憑することを主眼としたものではあるが、それと同時に其の基礎をなすところの客觀的事實（特に接境關係）に關しても、狭い紙幅の許す限り努力した積りである。

五、本冊子は七人の合作にかゝる。これ等の人々は親しく滿洲に於て現に或は嘗て專掌した事項を分擔したものであり、所興の頁數が餘りに乏しかつたに拘はらず、それぐの特色によりて本小冊子を飾り得たことは、編者の大に欣快とするところである。

昭和六年十一月

編者

滿洲と日本 目次

序	三
第一章 序 説	一
第二章 支那の展望	六
第一節 南京政權と赤軍及び軍閥	六
第二節 上海資本家階級と列強及び大洪水	八
第三節 政權の分裂及び資本集積の停滯	三
第三章 滿洲資本主義の發達段階	七
第一節 東北鐵道網の財源	七
第二節 「鐵道攻勢」の真相	三
第三節 滿洲工業資本の解剖	四

第四節 金融の紊亂と其の剝奪機能	三五
第四章 特殊地位の意義上	四五
第一節 國防問題	四五
第二節 治安問題	四九
第三節 經濟關係	五四
第四節 條約關係	五九
第五章 特殊地位の意義下	六六
第一節 孫文の言葉	六六
第二節 滿洲統一と日本	六六
第三節 農業經濟の發展と日本	七五
第六章 鐵道に關する爭執	八四
第一節 併行線と日本の主張	八四
第二節 鐵道敷設權問題	八六
第三節 其他の爭執及解決策	八九
第七章 鑛業に關する爭執	九六
第一節 鑛業經營の不可能	九六
第二節 鑛業侵害の實例	一〇〇
第八章 課税に關する爭執	一〇四
第一節 大連港に關する問題	一〇四
第二節 滿鐵附屬地に關する問題	一〇八
第九章 朝鮮人の生存權	一一三
第一節 支那官憲の迫害	一一三
第二節 解決の基本條件	一一八
第十章 條約の不履行	一二三

第一節 大正四年協約の諸條項……………三三

第二節 鑛業權、鐵道運賃の差別徵收、其他……………三四

第十一章 排日運動の指導者……………三五

第一節 若き獨裁官と其周圍……………三五

第二節 周到なる排日の網……………三六

第三節 排日教育と滿洲問題……………三四

第十二章 既得權批判の諸問題(上)……………四〇

第一節 日支協約の法理論的考察……………四〇

第二節 日支協約の事實論的考察……………四三

第十三章 既得權批判の諸問題(下)……………四五

第一節 鐵道守備兵の問題……………四五

第二節 鐵道附屬地の諸問題……………四五

第三節 滿鐵併行線問題……………二五

第十四章 結 論……………二六

第一節 無理解の危險……………二七

第二節 問題解決の原則……………二七

滿洲と日本

第二章 序 説



茲に所謂滿洲とは、支那の行政區劃に就いて言へば大體遼寧、吉林、黑龍江、熱河四省の疆域に當り、日本流の稱呼に従へば南北滿洲及び東部內蒙古の三區劃を含む。南滿洲は洮泰屯墾區を含めての遼寧省に、琿春から吉林長春を経て大饒に至る線以南の吉林省を併せた地域、北滿洲は前記以外の吉林省及び黑龍江省一圓を意味し、所謂東部內蒙古の西縁は明瞭を缺くが、惟ふに熱河省以外察哈爾省の張家口及び多倫諾爾附近をも含むものであらう。

それは兎に角九月十八日に發生した所謂滿洲事變の起因に關し、日本政府は同月二十四日附を以て左の如く聲明した。

帝國政府は既に日華兩國の親交を篤うし共共存共榮の實を擧ぐることを一定の方針とし、終始これが實現を期して苦心努力し來れり。不幸にして過去數年、中國官民の言動は屢々我が國民的感情を刺激するものあり。殊に我が國の最も緊密なる利害關係を有する滿蒙地方に於

て最近不快なる事件頻發し、遂に我が友好公正なる政策も中國側より同一の精神を以て酬ゆるところとならざるが如き印象を我が國民一般の心理に與へ物骨驟然たるに當り、たたく九月十八日夜半奉天附近に於て中國軍隊の一部は南滿洲鐵道の線路を破壊し、我が守備隊を襲撃しこれと衝突するに至れり。

同じ問題を吾側では如何に解釋して居るとか云ふに、吾人は多數の文獻中から出色のものとして、去る九月二十五日の天津益世報の社説を引用することが出来る。先づ政治的には、

日本政府が敢て凶暴の手段を以て我が東三省に對付する所以のものは、實に我が東北の當局が平日より國權維護の職責を盡し、よく力を國民利益の保全に致し、日人をして内地種居と土地商租とを貫徹し能はざらしめ、兩路兩港の計畫を實現し能はざらしめしによれり。而して近年來、中日間の懸案は日本帝國主義の侵略に反抗する意態を帯びざるなく、東北の當局と民衆とは、日として日人との齟齬中に在ることなし。抑て日人侵略の野心も其の狡計を施すところなく、遂に蠻横強恨の方法を以て我が當局の屈服を強迫するに至れり。

約言すれば支那、特に滿洲に於ける國權回復のイデオロギイ及び其の手段として一切の排日行動の正當性を高調したものである。次に經濟的には、

我が東三省が日人の嫉視を招く所以のものは、一つには鐵路計畫の逐漸完成、二つには葫蘆商港の斯の如き修築、三つには前會生産の次第開展、四つには金融資本の既に集中を見たるによれり。凡そ富強の基礎たるべきものは均しく蒸蒸日上り、建立は益々穩固に赴きつゝあるが故に、日人はこれを以て滿洲併呑の實行を妨害するものなりと認め、我が羽翼の豐滿なるをまたずして、必ず我に與ふるに迎頭の打撃を以てせんとせり。即ち東北の禍根は決して我が國の墮落によるに非ずして、却つて我が國の向上によれり。…近年來東北の一切の事業には均しく顯著なる進展ありて日本の舉國上下を異常に驚駭せしめつゝあるが故に、大勢の赴くところ終に最後の衝突を免かれざるは、これ常識のよく判斷するところなり

とす。

經濟事項に關する益世報の主張をマルクス主義者の言葉で要約すれば「資本主義は其の發達の結果、帝國主義を生産したと同時に、他方には其の反對物たる帝國主義反對のイデオロギイをも生産した。此の兩者は今や滿洲を中心にして相衝突し、日本帝國主義は其の獨占既得權益を危ふからしめ、其れに對抗して日本は飽くまで自己を強力を以ても貫くことを主張して居る」(石澤知行氏、南匯相の滿蒙論)と云ふことになる。抑も益世報の滿洲事變の必然性に關する主張の二つの

部分は厳密に因果關係をなすものであり、第一部分たる政治現象は第二部分たる經濟現象の結果なのであるから、若し經濟現象に關する益世報の認識が正しくば、其所産たる政治現象に關する認識も亦正しい。又同じ問題に關するマルクス主義者の批評に就いて云へば、資本主義が滿洲に日本帝國主義の獨占既得權益を生産したと及びそれが同時に其の同地域に其の反對物たる帝國主義反對のイデオロギを生産したことは、抽象的には動かすべからざる眞理である。然し唯これだけで、魯人の持つ帝國主義反對のイデオロギ、殊に其の基礎たる滿洲資本主義の發達が、果して現實に滿洲に於ける日本の地位を危殆に陥れるに足る程高い段階に達して居るか否かを知ることは出来ない。これを知るためには先づ滿洲に於ける經濟諸現象の測定を行ふ必要がある。且、滿洲は支那の一部分である、支那資本主義は揚子江下流地方、換言すれば上海及び南京を中心として進退しつゝあるものだから、滿洲に於ける經濟現象に關して完全なる認識を形造るためには、其の背景をなすところの上海及び南京に於ける政治經濟現象に關しても或程度の見透しを持つ必要がある。先づ後者に就いて略説しよう。(橋樑)

(1) 開路兩港の計畫とは現在の南滿洲鐵道及び大連港の外に、吉會鐵道及び清津港の實現を、日本が主として軍事上の見地から渴望して居ると云ふことを意味する。

(2) 原文に金融資本の集中とあるが、其の眞意は、恐らく資本の集積及び金融の改善と云ふ程度のことであらう。

(3) 政治現象とはこれを要約すれば、國權回復及び其の手段としての一切の反日行動であり、經濟現象とは益世報によれば滿洲に於ける交通施設の進歩、工業の發達、金融の改善を意味する。